

近未来、**獣**^敵の襲来はもまない。

あなたと

ここに

——いらたけなぞ、なんのためだにわたしたちは戦うのか？

今最も戦闘的な作家、浦賀和宏があの高河ゆんとタッグを組み描き出す、

いらたけなぞ

こと

浦賀和宏

終わりのなき絶望を生きる少女からの、長い、長い手紙——。

Illustration / 高河ゆん

●本文使用書体 / モトヤアボロ 1

クラビウス基地からオオトモさんがやって来たのは、雨が降りしきる冬の、ある日の夜のことでした。

オオトモさんは再建したクラビウス基地に駐在している日本海軍の士官です。昔は海を渡って他の国と戦いました。《獣》らと戦うようになった今でも、それは変わりません。オオトモさんは部下を指揮して、《獣》らが住む星にまで船を出します。空爆をしてある地帯の敵を一掃した後、《獣》らの星に降り立ち、そこで白兵戦を行います。今まで人類側には多くの死傷者が出ました。しかしそれを差し引いても、我々が《獣》らに与えたダメージは甚大でした。

オオトモさんは、白兵戦に参加して《獣》を百匹以上殺したそうです。オオトモさんと会うたびに彼の新しい

なおさら、親の決めた相手と結婚するのは嫌だったでしょう。

でも私は違いました。私は学校でいじめにあつていました。クラスの一部の人たちに、お前は村を逃げ出した裏切り者の妹なんだと、酷い言葉で罵られます。姉さんは《獣》らに洗脳されたのだと言う人もあらわれませんでした。《コバヤシ熱》に感染したのだと言う人まで。

——ごめんなさい。決して姉さんを責めているわけではないのです。

でもこの村には、確かに、もちろん全員ではないですが、残酷な人がいました。娯楽が少ないから、人を中傷することしか楽しみがないのです。

ひそかに私は《獣》がこの村を襲うことを望んでいました。そうすればみんなメチャクチャになって、クラスの人たちにも私をいじめる心の余裕なんてなくなるだろうと思ったからです。

《獣》らは平等に私たちを襲うはずです。いじめられている私も、私をいじめているあの人たちも、私がいじめ

武勇伝をきかれます。オオトモさんは《獣》らが、そして《獣》らの星が、どんなに醜悪で悪意に満ちた存在なのか、私に教えてくれました。

村の人たちは、大きな声でこそ言いませんが、姉さんは駆け落ちしたのだと噂していました。親の決めた相手と結婚するのが嫌で逃げ出したのだと。真実は分かりませんが。そうかももしれないし、そうでないかもしれない。でも私は詮索しようとは思いません。姉さんがこの村を出た理由は、姉さんだけのものです。他の誰かが、たとえ妹の私でも、簡単に、ああだったとかこうだったとかと決めつけることはできないのです。

オオトモさんが、私の将来の結婚相手でした。父さんは、そういったことはなにも言いませんでしたけど、早くからオオトモさんを私に紹介したりして、この家にとって彼が特別な存在であることはうすうす気付いています。

姉さんには、当時、父さんが決めた結婚相手以外に、恋人がいたそうですね。彼のことを愛していたらこそ、

られているのを見て見ぬふりをしている人たちも、みな公平に《獣》らに襲われるのです。そうなればもう、私だけが蔑まれることはないのです。

私はずっと孤独でした。だから私は、オオトモさんを自然に受け入れることができたんだと思います。親が決めた相手だから嫌だとか、そんな選り好みができる立場ではなかったのです。

一年ぶりにオオトモさんが村に帰ってきたのは、ある事件を調査するためでした。村の評議会館でフクダという通信兵が殺されました。その話を聞いた時、私はどうとう《獣》らが村に侵入したのだと思います。でも事実は違いました。どうやら彼は、同胞によって殺されたそうなのです。

仲間を殺すことは、亡命と敵前逃亡に次ぐ重罪です。しかし厳しく禁じられていても、同胞による殺人事件はまれに起こります。(姉さんが逃げる際にも何人かの兵士が命を落としたとききましたが、私は姉さんが手を下したのではないと信じています)中でも今回の事件は特

殊なものでした。

私は父さんから、オオトモさんの調査に同行する許可をもらいました。でも許されるのは訊く前から分かっていました。私がオオトモさんと過ごす時間が長ければ長いほど父さんにとっては都合がいいのです。父さんの思惑通り操られている自分を感じましたが、私はそれでもかまいませんでした。こういうことに限らず、私が父さんに対して反発することは滅多にありませんでしたから。

子供には反抗期というものが存在するということは知識として知っていました。でも私には、それが少しもありませんでした。背が伸び体つきがふっくらして、やがて初潮を迎えても、私には父さんに対する反抗心がこぼれつつも目覚めなかったのです。

私は前述したように友達がいまいませんでしたから、オオトモさんと出会うまでは村の図書館に入り浸る毎日が続いていました。図書館に入る本は審査されていました。が、反戦を訴える内容の本が入らないくらいで、名作と

呼ばれる文学は大抵そろっていました。そういう本を沢山読めば分かります。青年は、親や社会に反発し乗り越えていくことで成長してゆくと。そしてそれは、思春期と呼ばれる時期と重なっているのです。

それはたとえば、この戦争に反対したいという気持ちでもいいでしょう。そんなことを考えるのはいけないことだと分かっています。戦いを止めたら私たちは《獣》らの奴隷になるほかないのですから。しかし、心だけは決して誰にも縛ることはできません。体制にそむくのは、若者ならば誰でも一度は通るイニシエーションです。反抗して、戦って、そして屈服することで、子供は大人へと脱皮するのです。

親や社会が子供たちに押しつける重圧がどれほどのものか、それがどんなに耐え難いものなのか、私はずっと姉さんに訊いてみたかった。

姉さんのように、村を出て行く勇氣なんて私にはありませんでした。

私はもう、村を出た当時の姉さんと同じ歳になったの

です。それなのに、私には反抗心が芽生えません。私は時々怖くなります——はたして自分はちゃんとした大人になれるのだろうか。大人に反抗したこともない人間が、ろくな大人になれるはずがありません。打ちのめされて負けることで人は成長します。それはいわば戦いの模擬訓練なのです。訓練を通らない子供では《獣》らには勝てません。本物の戦いに勝利することは、決してできないのです。

あなたはきっと森のどこかで、大人として生きていることでしょう。だって誰もやらなかった究極の反抗を、あなたはやったのですから。あの夜、あなたは私の前から消えました。そして二度と戻ってこなかった。

もし(そんなことは絶対にないでしょうが)オオトモさんが私に駆け落ちを申し出たら、恐らく私はそれを受けられるでしょう。そしてオオトモさんと一緒に村から逃げるでしょう。でもそんなものは、本当の反抗ではないのです。自分を殺して、他人にしたがうのと同じです。そ

れは、奴隷になるということなのです。

姉さん、私はあなたを恨みます。

もし姉さんがそばにいてくれたら、きっと私は今よりも、もう少しだけ強い女になれたはずなのに。

2

私はオオトモさんと共に事件現場となった評議会館に向かいました。父さんは私がオオトモさんの仕事、かりを良く見ておくことを望んでいたのでしょうが、オオトモさんは殺人現場を見ることを許してはくれませんでした——。それはオオトモさんなりの私に対する優しさだったのでしょう。

私は思わず、ほっと胸をなで下ろしました。むごたらしい死体など見たくはありません。いずれ嫌というほど見なければならぬと分かっています——。

薄く開いたドアの向こう側から、オオトモさんの話し声が聞こえてきます。思い出しながら書きますが、大体

こんな内容だったように思います。

——《トマト》がここに落ちていた。だが証拠には恐らくならないだろう。《オニオン》の連中ならみんな持っている。あいつらが指紋を残すなんてそんな間抜けなミスをするとは思えないし——

——フクダは口をふさがれたのか——

——ああ。《トマト》を持っていたところを捕まえた。尋問した結果、彼が《オニオン》の売人であることが分かった——

——取り引きを持ちかけたんだな——

——そうだ。仲間を売ればお前を赦免してやるとな。

フクダは動揺してたよ。明らかに彼は取り引きに応じる素振りをみせていたのに、惜しいことをした。せっかく腐ったタマネギ連中を一網打尽にできるところだったのに——

——フクダはずっとこの部屋にいたのか？——

——ああ、逮捕してからずっとだ——

娘であることは誰もが知っていましたから。私がクラスの人たちに嫌われるのも、そういうところに理由があるのかも知れません。

「すまなかったね。様子を見るだけのつもりだったが、ついつい話し込んでしまった」

評議会議館の中の、殺人現場とは別の部屋です。オオトモさんが気遣って二人だけになれる場所に案内してくれました。先ほどの殺人現場の喧噪が嘘のように、ここは静かでした。

「さっき、聞いてしまいました。事件の大まかな内容を」

ああ——そう言って彼は笑いました。

「あんなものは、大した情報じゃない。本当の機密事項とは大声で人と喋ったりしないものだ」

もし、あれが機密であっても恐らく大丈夫です。だって私には言いふらす相手なんていないのです——そういう冗談を言おうと思ったけど、止めました。私の心の多

——この評議会議館内に内通者がいるに違いない。それはこの開いた窓から逃走したんだ。入ってきたドアからふたたび逃げるのはリスクが大きいと判断したんだろう——

——高いな。届くか？——

——机を壁によせて飛び移れば不可能じゃない。現にこの机は中央から動いている。わざとこんなふうには置かないだろう。誰かが動かした証拠だ——

——足跡は？——

——もちろん、今調べている——

その後もオオトモさんは、一緒にこの事件を調査しているパートナーと事件についてあれこれ話し合っています。その間、大勢の人たちが、部屋と外を行き来しています。私はできるだけ目をあわせないように下を向いていました。子供がこんなところでなにをしているのだ、と叱られると思ったからです。もちろん、そんなことはありえないことは分かっています。私が父さんの

くは、ほとんどオオトモさんの存在が占めていました。しかしオオトモさんはそうではないのです。きつとオオトモさんの心に占める私の割合など、微々たるものでしょう。半分以上、いやほとんどがきつと《獣》らとの戦いのことで埋まっています。残りは何でしょう？ 家族のこと。ひよっとしたらほかのガールフレンドのこと。いずれにしても、私に残された彼の心のスペースなど、ほんの数パーセントしかありません。

私は彼のことがばかり考えているのに、彼はそうではありません——それを考えると気がふれそうになりました。彼と結婚する未来など決して確実なものではない——そんな当たり前すぎる現実をまざまざと思ひ知らされるからです。

「こういう事件は一度目だよ」

どういうことですか？ と私は訊きました。

「《トマト》の売人が口封しのために殺される事件だ。半年前、まったく同じ事件が森のはずれにある病院で起こった。そいつは俺たちから逃走する最中《獣》の襲撃